

「モスクワ・パピルス No.120」における 接尾代名詞=*w* の表記とその環境

永井 正勝†


キーワード： 神官文字、字形、異表記、文献言語学


1 はじめに

古エジプト語から中エジプト語まで、3 人称男女共通複数形の接尾代名詞の語形は=*sn* であったが、新エジプト語になると革新形の=*w* が使用されるようになる。古い語形の=*sn* もしばらくは併存されていたが、やがて=*w* が支配的となり、コプト・エジプト語においても **oy** /w/ として残ることになる。このような語の交替は、文法を学習する上で難しいことではないが、接尾代名詞=*w* を判別する上で厄介なのは、その表記法である。

新エジプト語の=*w* は例えば (1a) のように「子音文字 *w*」と「三本線」で表記される。ところが、=*w* の表記は、(1b) のように「三本線」のみで示されることもある。

(1) 聖刻文字による=*w* の表記の例

a  子音文字 *w* + 三本線

b  三本線

三本線の文字は、接尾代名詞=*w* だけではなく、限定符として種々の語

†筑波大学人文社会系

にも付加されることがあり、字形が単純であるだけに、三本線の文字が接尾代名詞として使用されているのか、それ以外の語の限定符として使用されているのか、時に判断に苦しむこととなる。

このような接尾代名詞=*w* の表記とその環境について、Černý & Groll (1993) である程度の指摘がなされている。しかしながら、環境の解説が註で簡単に述べられているのみで、それぞれの表記の違いが定量的に示されているわけではない。そこで本稿では、Černý & Groll (1993) による=*w* の表記の解説で用いられている「モスクワ・パピルス No.120」を資料として、3 人称男女共通複数形の接尾代名詞=*w* の表記とその環境に関する定量的な記述を行うことにする。

2 Černý & Groll (1993) による=*w* の表記とその記述

2.1 文法書の文字と原資料の文字の違い

新エジプト語で核となる言語変種は、非文学語と呼ばれるテキスト群であり、新エジプト語の文法書である Černý & Groll (1993) も非文学語の記述を目指したものであった。非文学語と呼ばれる言語変種は、神官文字と呼ばれる筆記体の文字で表記されており、したがって文法書における例文の記載も神官文字で示されるのが望ましい。ところが、新エジプト語の文法書では、すべての例文が聖刻文字と呼ばれるブロック体の文字で示されている。このように、エジプト学では筆記体の資料を筆記体のままで提示するという習慣が根付いておらず、学者達は筆記体をブロック体に文字翻訳したものを「資料」と称して使用している。

このようなことが常態となっている理由は、第一に、神官文字は聖刻文字の筆記体であり、両者の対応は一对一の関係にある、ということをも多くのエジプト学者が漠然と想定していることにある。しかしながら、神官文字と聖刻文字は十全な意味で一对一に対応するわけではなく、それゆえ、両者は互いに異なる文字体系であった、という点をエジプト学者は認識すべきであろう。

また、聖刻文字への文字翻訳が利用されている第二の理由として、原資料の筆記体 (神官文字) を読むことの出来ない学者が少なからず存在して

いるという事態が考えられる。つまり、エジプト学者であっても神官文字を読むことができないことが多いため、神官文字を読むことのできる一部の専門家が神官文字をわざわざ聖刻文字に置き換えているのである。しかしながら、先に述べたように、神官文字と聖刻文字は十全な意味で一対一に対応するわけではなく、聖刻文字に転写された資料から、元の神官文字を復元することはできない。したがって、神官文字を聖刻文字に転写したものは、文字翻訳というべき「代用物」となっている¹。

本稿で扱う接尾代名詞=*w* の表記についても、聖刻文字への文字翻訳では伝わらない特徴が神官文字の原資料の中に見いだされるのである。

2.2 Černý & Groll (1993) における=*w* の記述

本稿は接尾代名詞全体の文法記述を目指したものではないので、Černý & Groll (1993) における=*w* の表記のみを取り上げる。表 1 は Černý & Groll (1993: 28) に掲載されている 3 人称男女共通複数形の接尾代名詞の例である²。

表 1 : Černý & Groll (1993: 28) における=*sn*/*w* の表記例

3rd. pers. pl.	<p>.<i>sn</i></p> <p>.<i>w</i></p>	<p>𓂏𓂏𓂏 51.</p> <p>e 52.</p> <p>e = 53.</p> <p>54.</p> <p>e III 55.</p> <p> 56.</p> <p>= 57.</p> <p>ae 58.</p> <p>ae =</p>
----------------	------------------------------------	--

Černý & Groll (1993) によれば、=*sn* の表記として 1 種類が、そして=*w* の異表記として 7 種類が認められ、それらの環境と典拠は註 51-58 で簡単に示されている。以下、註の内容をもとに、異表記の環境を記す。

¹ 新王国時代の神官文字を聖刻文字に直すことの問題点については Gardiner (1929) を参照。

² 接尾代名詞を示す転写上の工夫として、Černý & Groll (1993) では「|」が付加されているが、本稿では Junge (2005) に従い「=」を用いている。

註 51 の=*sn* は第 19 王朝まで使用されたもので、第 20 王朝になると註 52 の=*w* が使用される。註 52 の表記と類似したものには、三本線の向きの違いから、註 53 と註 54 の異表記もある。また、註 57 と 58 の表記は、それぞれ註 52 と註 53 の表記の前に *t* の文字を付加したのとなっており、これらは *t* で終わる語の後に用いられる。そして、三本線のみで表記される註 55 と註 56 の表記は、子音の *w* の後で使用される。この解説をもとに、より体系的な分類を行うと、表 2 が得られる。

表 2 : Černý & Groll (1993: 28) による=*w* の分類の再整理

	[A]基本表記	[B]重音脱落表記	[C]重音添加表記
1	註 52 [語幹]+[<i>w</i> -三本線]	註 55 [- <i>w</i> 語幹]+[<i>o</i> -三本線]	註 57 [- <i>t</i> 語幹]+[<i>t-w</i> -三本線]
2	註 53 [語幹]+[<i>w</i> -三本線]	註 56 [- <i>w</i> 語幹]+[<i>o</i> -三本線]	註 58 [- <i>t</i> 語幹]+[<i>t-w</i> -三本線]
3	註 54 [語幹]+[<i>w</i> -三本線]	-	-

つまり、3 人称男女共通複数形の接尾代名詞=*w* は、子音文字 *w* に三本線を付加した綴りが基本表記となっている。その上で、語幹が=*w* で終わる場合には、重音する *w* を省略した重音脱落表記が採用される。また、語幹が=*t* で終わる場合には、語幹を重ね書きした重音添加表記が採用されることになる。

このように見るとかなり体系的な表記となっているが、しかしながらそれでも、語幹が *w* になっていれば一律で重音脱落表記となるか、あるいは下位区分の 1~3 がどのように使い分けられているのかなど、異表記の環境に関する詳細について、Černý & Groll (1993: 28) で十分な説明がなされているわけではない。

そこで本稿では、このような異表記のあり方を神官文字で確認することにした。Černý & Groll (1993: 28) が挙げる註 52-57 の用例がすべて「モスクワ・パピルス No.120」から引用したものとなっていることを鑑み、本

稿では「モスクワ・パピルス No.120」を分析対象とする。

3 神官文字の確認

3.1 接尾代名詞=*w* の表記で用いられる神官文字の番号

Černý & Groll (1993: 28) に記されている註 52-58 の表記を、神官文字番号³で示すと、表 3 のようになる。

表 3 : Černý & Groll (1993: 28) の註 52-58 の表記の神官文字番号

	[A]基本表記	[B]重音脱落表記	[C]重音添加表記
1	200B+563	563	575+200B+563
2	200B+562	562	575+200B+562
3	200B+561	—	—

文字の種類について確認しておく、基本表記の語頭で使用される 200B の文字が子音の *w* を示す。そして、その後付加された三本線 (561-563) が複数を示す限定符となる。このような「200B+561-563」を基本表記としつつも、語幹が *w* で終わる場合には、子音の *w* を示す 200B が省略される (重音脱落表記)。また、語幹が *t* で終わる場合には、*t* を示す 575 が添加される (重音添加表記)。

3.2 神官文字の 561-563 の字形と聖刻文字との対応

神官文字 561-563 とそれに対応する聖刻文字は表 4 に示した通りである⁵。なお、表 2 と表 3 との対応を考慮し、表 4 も 563 から順に配列している。

最初に、神官文字と聖刻文字の対応について注意点を述べておく。Gardiner (1957) で与えられている聖刻文字番号では、神官文字の 561 に対応する文字が Z2、563 に対応する聖刻文字が Z3 となっている。ところが、神官文字の 562 に対応する文字に特別な番号が与えられていないのである







³ 神官文字番号は Möller (1909-1912) に従う。

⁴ 聖刻文字の番号と字形は Gardiner (1957) に従った。

⁵ 表 4 の神官文字の字形は Möller (1909-1912: vol.2, “Harris, H.M.”) から転載した。

(Gardiner 1957: 536)。そこで本稿では、562 に対応する文字に Z3a という番号を与えることにした。

表 4：神官文字の 561-563 とそれに対応する聖刻文字

神官文字		聖刻文字	
563		Z3	
562		Z3a	
561		Z2	

Gardiner (1957) によれば、これらの文字の違いは次の通りとなる。Z3 は第 12 王朝時代以降の聖刻文字で一般的な字形となるものであり、Z2 と同様に使用される。つまり、聖刻文字の Z3 は Z2 の異体字として後から生じたものとなる。だが、神官文字では状況が異なり、563 (=Z3) の使用は「まれ」であり、神官文字のもともとの字形は 562 (=Z3a) となる (Gardiner 1957: 536)。

次にそれぞれの文字の字形について確認しておきたい。最初に聖刻文字について確認すると、Z2, Z3, Z3a は、いずれも三本の短線を字素に持っているという点で共通しているが、字素の向きと配列から、それぞれが区別されることになる。それに対して神官文字では、やや状況が異なる。561 と 562 は、三本の短線を字素に持つという点で対応する聖刻文字と類似している。ところが 563 の字形は、それらとは異なっている。つまり、563 は同一形状の字素によって構成されているのではなく、「斜め方向の二本の短線+縦方向の一本の直線」によって構成されている。しかも、562 と 561 が左から筆が入っているのに対して、563 は右から筆が入っている。このような字形の特徴を考えると、563 は字形の上で有標であると言える。

この 563 (=Z3) について、Gardiner は、神官文字で「まれ」だと述べて

いた。そこで、神官文字の基本書である Möller (1909-1912: vol.1, 54; vol.2.50, vol.3, 54) でそれを確認してみると、確かに 561 と 562 は全時代に渡ってくまなく使用されているが、563 は「中王国時代」ならびに「新王国時代の後半」のみで使用されていることがわかる。しかも、中王国時代の 563 の字形 (Möller 1909-1912: vol.1, 54) は表 4 に掲載した字形とは異なっている。したがって表 4 に掲載した 563 の字形は、新王国時代の後半で典型的に確認されたものだと言える。「まれ」な存在であるという Gardiner の指摘は、文字史の上で、妥当な見解だと言えよう。

4 用例の分析

4.1 資料

Černý & Groll (1993: 28) が引用していた註 52-57 の資料はすべて「モスクワ・パピルス No.120」であった。そこで本稿でも、この 1 点の資料をもとに表記の確認を行う。

本資料は古代エジプト第 20 王朝時代のパピルス写本であり、現在はモスクワ・プーシキン美術館に所蔵されている。本来であればパピルスの現物を実見し、すべての文字を確認する必要があるが、そのような資料調査を行うことができなかつたため、分析には Коростовицв (1960) に掲載されている写真を用いることにする。Коростовицв (1960) の写真は解像度と精度が低く、しかもモノクロ写真であるゆえ、文字の細部を確認する際に苦労を要する部分が少なくないが、それに代わる資料が他にないため、Коростовицв (1960) の写真を資料として分析を進める。

4.2 当該資料における 561-563 の確認

4.2.1 文字数

3 人称男女共通複数形の接尾代名詞=w の表記について確認する前に、神官文字 561-563 の分布を確認しておきたい。その際、Коростовицв (1960) に掲載されているモノクロ写真を用い、文脈の上で 561-563 の存在が想定される場合でも、欠損などにより文字が判読できない場合には、分析の対象から除外した。このような方針で確認をしたところ、「モスクワ・パピルス

No.120」において、561-563 の文字は延べ 239 例が認められた。その内訳は 561 が 124 例、562 が 67 例、563 が 48 例である。

4.2.2 用法

239 例の 561-563 のうち、パピルスの「1,32」⁶で確認された 561 については、その前の部分が欠損しており、用法を認定することができなかった。そこで、この 1 例を省いた全 238 例をもとに用例を確認したところ、①限定符 230 例、②音節補助 8 例の用法が認められた (資料 1-3)。

4.2.2.1 音節補助としての用法

対象とする 238 例の 561-563 のうち、音節補助としての用例はわずかに 8 例 (約 3.4%) である (資料 1)。それら 8 例の文字はすべて 561 であり、しかもすべてが神官文字 331 の後に用いられている。

331 の文字は子音の *n* を表す表音文字であり、これと 561 が組合わさることによって *n* で始まる音節が示されている。元来、聖刻文字と神官文字は子音文字であるが、新エジプト語以降、主に外来語を表記する際に、このような音節表記法が採用された (Junge 2005: 42-45)。

音節補助で使用される三本線として 561 のみが用いられている理由には、その字形が大きく関係しているものと思われる。古代エジプトの書記は、神官文字や聖刻文字の表記において、原稿用紙のような升目を想定し、その升目の内部に文字をバランスよく配列しながら、表記を行っていた (永井 2005)。その結果、一升の中に複数の文字を埋め込むことが常態であった。神官文字の 331 は、漢字の「一」のように横長の文字である。そして 561 も、全体の字形が横長の文字となる。そこで両者を一升の中に上下に配列させると、升目の内部がバランスよく埋まることになる。それに対して、562 と 563 は縦長の字形となるので、升目内の配置にそぐわないことになる。このように、音節補助の用例では、升目内配置という要請から、561 が採用されたものと思われる。

⁶ 1,32 とはパピルスの 1 枚目の 32 行目を示す。

4.2.2.2 限定符としての用法

限定符としての用法は全部で 230 例である (資料 2-3)。古エジプト語と中エジプト語では、一つの数が単数、二つの数が双数、三つ以上の数が複数となる。三つ以上の数が複数として扱われることにより、三本線で示される聖刻文字の Z2, Z3a, Z3 ならびに神官文字の 561, 562, 563 が、複数形を示す限定符として使用されている。

また、複数形を示すという用法が拡大され、561, 562, 563/ Z2, Z3a, Z3 は、集合名詞の限定符としても使用された。*rrmw*「魚」(資料 2, ID.78) の語は文法的に単数形となるが、実際に示す対象物が複数であるため、この語には、集合名詞を示す限定符として三本線が付加された。

さらに、*nb*「金」(資料 2, ID.74 他) や *ḥd*「銀」(資料 2, ID.75 他) などの物質名詞にも、561, 562, 563/ Z2, Z3a, Z3 が使用された。

その他、理由は定かではないが、動詞 *sm*「寝る」(資料 2, ID.24) の限定符など、特定の語に 561, 562, 563/ Z2, Z3a, Z3 が付加されることもある。

以上に列挙した、①複数形に付く、②集合名詞に付く、③物質名詞に付く、④特定の語に付く、という用法を、本稿では限定符として一括しておく。この上で、限定符としての用法を、3 人称男女共通複数形の接尾代名詞=*w*(資料 3, ID.174-238) と、それ以外の語 (資料 2, ID.9-173) とに分けて整理すると、表 5 が得られる。

表 5 : 限定符として使用される 561-563 の例数と割合

	561	562	563	合計
全体	114 (49.6%)	69 (30.0%)	47 (20.4%)	230 (100%)
= <i>w</i> 以外の語 の限定符	109 (66.1%)	50 (30.3%)	6 (3.6%)	165 (100%)
= <i>w</i> の限定符	5 (7.7%)	19 (29.2%)	41 (63.1%)	65 (100%)

限定符としての用例数は、全体で確認すると、561 が 114 例、562 が 69

例、563 が 47 例であり、563 の例が最も少ない。ところが、接尾代名詞の =w とそれ以外の語とに分けて確認すると、状況が一変する (表 6)。

表 6 : 限定符として使用される 561-563 の例数と割合

分類	=w 以外の語	=w	合計
561	109 (95.6%)	5 (4.4%)	114 (100%)
562	50 (72.5%)	19 (27.5%)	69 (100%)
563	6 (12.8%)	41 (87.2%)	47 (100%)

=w 以外の語の場合には、561 の割合が増し、その分、563 の割合が減じている。一方、=w の限定符を見ると、563 の割合が最も高く、そのかわり、全体で最も数が多かった 561 の割合が激減している

5 接尾代名詞=w の表記とその用例

5.1 全体の用例数

Černý & Groll (1993: 28) を参考にすると、接尾代名詞=w の表記には、表 2 の A1, A2, A3, B1, B2, C1, C2 の 7 種類が確認され、そのうち C2 を除く 6 種類が「モスクワ・パピルス No.120」の事例となる。しかしながら、Černý & Groll (1993: 28) では、それぞれの表記ごとの用例数が示されているわけではなかった。そこで本稿では、それぞれの表記ごとの用例を確認し、表 7 のような結果を得た (資料 3)。

Černý & Groll (1993: 28) では重音添加表記が設定されているが、筆者が分析したところ、その用例を認めることができなかった。そこで最初に重音添加表記について考えてみたい。

表 7: 「モスクワ・パピルス No.120」における=w の表記の例数 (全 65 例)

	[A]基本表記	[B]重音脱落表記	[C]重音添加表記
1	200B+563 13 例	563 28 例	575+200B+563 -
2	200B+562 18 例	562 1 例	
3	200B+561 5 例		

5.2 重音添加表記について

Černý & Groll (1993: 28) では重音添加表記の例が記載されている。それはパピルスの「2,38」に見られる以下の用例である⁷。

(2) 「モスクワ・パピルス No.120」 (2,38)

iw =*f* (*hr*)-*di.t* *in.tw=w*
 小辞 彼 過去-させた もたらす.受動-それら

r *km.t*
 へ エジプト

「彼は、それらがエジプトにもたらされるようにさせた。」

この例で、*in.tw=w* にある=w が 3 人称男女共通複数形の接尾代名詞である。この部分は、動詞 *in* 「もたらす」、*.tw* 「受動」、=w 「彼ら」という三つの形態素から成っており、綴りは 496(*in*)+331(*n*)+575(*t*)+200B(*w*)+563(限定符) となっている⁸。496(*in*)+331(*n*)を動詞として判断するのは問題がないとして、残りの部分の表記を言語とどのように対応させていくのかが問題

⁷ 資料 3, ID.237。

⁸ 例えば 496(*in*)という表記は「No.496 の神官文字が *in* の音を示す」ことを表現したものである。

となる。

Černý & Groll (1993: 28) の見解は、動詞の後の部分、つまり 575(*t*)+200B(*w*)+563(限定符)の全体を 3 人称男女共通複数形の接尾代名詞 =*w* として判断している。しかしながら、この解釈では、受動の形態素が抜け落ちてしまう。

それゆえ本稿の筆者としては、この部分が、本来、動詞[496(*in*)+331(*n*)] + 受動形態素[575(*t*)+200B(*w*)] + 接尾代名詞[200B(*w*)+563(限定符)]の配列であったと捉え、重音部分の 200B(*w*) が一つ省略されている、と考えることにしたい。

とは言うものの、実際の用例において 200B(*w*) の表記は一つであり、これが受動形態素 *tw* の *w* であるのか、あるいは接尾代名詞 =*w* の *w* であるのか、判断が悩ましいところである。しかしながら本稿では、後半の要素が省略されたと考え、3 人称男女共通複数形の接尾代名詞 =*w* の表記を 563 のみと判断しておく。つまり(2)の用例は、重音添加表記ではなく、むしろ重音脱落表記の一例として捉えられることになる。

5.3 基本表記について

全 65 例の接尾代名詞 =*w* の中で、基本表記が 36 例用いられている (表 7)。このうち、563 を伴う A1 が 13 例、562 を伴う A2 が 18 例、561 を伴う A3 が 5 例となっている。4.2.2.2 で指摘したように、接尾代名詞 =*w* で最も多く使用されている三本線は 563 となるが、基本表記のみを見ると、5 例の差ではあるが、563 を伴う A1 よりも、562 を伴う A2 の方が多く使用されている (表 7)。その一方で、A1 と A2 の用例数と比較すると、561 を伴う A3 の数が極端に少ないとの印象を受ける。そこで、最初に A3 の用例から確認してみたい。

5.3.1 基本表記における A3 の用例について

A3 の用例は 5 例であるが、このうち 4 例は前置詞 *n* と結びついた与格で用いられている⁹。与格の前置詞 *n* は神官文字 331 で示されるが、音節補助

⁹ 資料 2, ID.205-208。

(4.2.2.1) で述べたように、神官文字の 331 は横長の文字であり、升目内配置型の表記法を取る神官文字にとって、331 と組み合わせる三本線は、字形の上で、561 がふさわしいことになる。

そして、残りの 1 例は不定詞 *wd*「命じる」の後に書かれたものである¹⁰。この場合は 561 の下に前置詞 *r* が書かれている。前置詞 *r* を示す神官文字の 91 も、331 と同様に横長の字形を持つ文字であり、だとすればこの用例の 561 も、升目内配置という要請から選択されたものと考えられる。

以上の結果をまとめると、A3 の表記は与格の前置詞の目的語 (4 例) と不定詞の目的語 (1 例) として用いられており、いずれも升目内配置という要請によって選択されたものと考えられる。逆に捉えれば、升目内配置という要請がない限り、A3 が選択されることはなかったものと考えられる。

5.3.2 基本表記における A1 と A2 の用例について

A1 と A2 の表記は、ともに縦長となるので、升目内配置という点では、どちらも同様な環境にあると言える。そこで以下では、A1 と A2 を対比させながら、これらがどのような要素の後に付随しているのかを確認してみたい。

5.3.2.1 不定詞の目的語

不定詞の目的語として使用されている例は、A1 が 3 例¹¹、A2 が 9 例¹²である。5.3.1 で述べた A3 の 1 例を合わせると、表 8 が得られる。

すでに述べたように、A3 の 1 例は升目内配置が大きく起因しているものと思われる。A1 と A2 の使い分けについては、特に明確な根拠を認めることができないが、不定詞の後の目的語としては、A2 が好まれる傾向にあることがわかる。また、A1 の使用については、特定の語との結びつきがあるのかもしれない。特に、*ir*「行う」については、5.3.2.3 で後述するように完了相の後でも A1 が使用されており、*ir*「行う」と A1 の結びつきが想定される。

¹⁰ 資料 2, ID.209。

¹¹ 資料 2, ID.183-185。

¹² 資料 2, ID.196-204。

表 8 : 不定詞の目的語として使用される基本表記

不定詞		基本表記の分類		
		A1	A2	A3
<i>grg</i>	「黙る」		1	
<i>ith</i>	「打つ」		1	
<i>sʰhʰ</i>	「立たせる」		1	
<i>šd</i>	「切る」		3	
<i>šsp</i>	「掴む」		1	
<i>šw</i>	「無くす」		1	
<i>hdb</i>	「切る」		1	
<i>ir</i>	「行う」	2		
<i>iwd</i>	「延ばす」	1		
<i>wd</i>	「命じる」			1
合計		3	9	1

表 9 : 前置詞の目的語として使用される基本表記

前置詞		基本表記の分類		
		A1	A2	A3
<i>(m-)di</i>	「ともに」		1	
<i>hʳ.r</i>	「うえに」		1	
<i>im</i>	「中に」	1	1	
<i>m-bʒh</i>	「前に」		1	
<i>m-hnw</i>	「中に」		1	
<i>r-hʒt{t}</i>	「前に」	1		
<i>n</i>	「に」			4
合計		2	5	4

5.3.2.2 前置詞の目的語

前置詞の目的語として使用されているものは、A1 が 2 例¹³、A2 が 5 例¹⁴である。これに、5.3.1 で述べた与格の A3 の 4 例を合わせると、表 9 が得られる。前置詞 *im* の後で A1 と A2 の用例が共に認められるものの、前置詞の目的語となる際にも、A2 の使用がやや好まれたようである。

5.3.2.3 動詞の主語として

ここで扱うのは不定詞以外の動詞形の主語として使用されている場合である。例数は表 10 に示した通りである¹⁵。

表 10 : 動詞の主語として使用される基本表記

動詞		基本表記の分類		
		A1	A2	A3
<i>dd</i>	「言った」	1		
<i>di</i>	「させた」		1	
<i>ir.y</i>	「行った」	3		
合計		4	1	

不定詞や前置詞の目的語とは異なり、A1 の使用が若干多いが、例数が少ないために、A1 が好まれていたのか否かについて、断言することができない。また、5.3.2.1 で述べたように、動詞 *ir* 「行う」については、不定詞の場合でも A1 が採用されており、この語と A1 の結びつきが想定される。

5.3.2.4 所有冠詞

所有冠詞の語源は指示詞 (*p3y/t3y/n3y*) に接尾代名詞が組合わさったものであるが、両者の形態素の融合が進み、「所有の意味を担った定冠詞」(所有冠詞)として使用されている。とは言うものの、表記上、接尾代名詞の部分を確認することができるので、所有冠詞内部における接尾代名詞を扱

¹³ 資料 2, ID.176-177。

¹⁴ 資料 2, ID.190-194。

¹⁵ A1 は資料 2, ID.178-181、A2 は同 ID.195 である。

うことにする。例数は表 11 に示した通りである¹⁶。

表 11 : 所有冠詞で使用される基本表記

所有冠詞		基本表記の分類		
		A1	A2	A3
$pzy=w$	「彼らの」	1	1	
$tzy=w$	「彼らの」		1	
$nzy=w$	「彼らの」	1	1	
合計		2	3	

不定詞の目的語と前置詞の目的語となる場合には、A2 が好まれる傾向にあったが、所有冠詞内の $=w$ では、A1 と A2 の使用に明確な差を認めることができない。

5.3.2.5 独立代名詞

独立代名詞の 2 人称と 3 人称の形状は、「 nt +接尾代名詞」に区分することができるが、所有冠詞の場合と同様、両者の要素が融合して一語の代名詞を形成している。しかし、表記上、接尾代名詞に相当する部分を見いだすことができるため、分析の都合、これも接尾代名詞 $=w$ に含めて取り上げる。 $=w$ を含む独立代名詞は、3 人称男女共通複数形の ntw である。当該資料における ntw の用例は 1 例¹⁷のみであり、 w の部分には A1 が使用されていた。

5.3.2.6 名詞に接続

接尾代名詞 $=w$ は名詞に接続して所有を表す。この用法は 1 例¹⁸のみであり、A1 が使用されていた。

¹⁶ A1 は資料 2, ID.174-175、A2 は同 ID.187-189 である。

¹⁷ 資料 3, ID.182。

¹⁸ 資料 3, ID.186。

5.3.3 小結

以上、36 例の基本表記の環境を確認した。A3 の使用については、升目内配置という表記上の制約に基づいて選択されたものであることがうかがわれる。A3 の用例が少ないことが、そのような制約の結果であることを裏付けているように思われる。言い換えれば、升目内配置という制約が働かない場合には、接尾代名詞= w の表記において、A3 の使用は一般的ではなかった。それに対して、A2 の使用は不定詞の目的語や前置詞の目的語で顕著であり、これらの環境で好んで使用されていたと言えるであろう。

5.4 重音脱落表記について

5.4.1 重音脱落表記と神官文字 563 の字形

重音脱落表記の用例は全部で 29 例である (表 7)。そのうち、563 が 28 例、562 が 1 例であり、重音脱落表記は 563 を基本としていることがわかる。その理由は、563 の形状にあるものと思われる。3.2 で述べたように、三本線で示される 561-563 の中で、有標な形状を持つものが 563 である。重音脱落表記は三本線のみで記されるという性格上、限定符の三本線と混同される恐れがあるのだが、それを避けるために、形状的に有標となる 563 が選択されたものと思われる。

5.4.2 重音脱落表記という名称とその性質について

重音脱落表記に該当する全 29 例のうち、半数以上の 17 例が小辞 iw と結びついたものとなっている。そこで、この iw を例に重音脱落表記のあり方について確認しておきたい。

当該資料において、小辞 iw は神官文字の「282(i)+200B(w)」によって表現される。この小辞 iw に接尾代名詞= w 「200B(w)+563(限定符)」が接続すると、 $iw=w$ 「282(i)+200B(w)+200B(w)+563(限定符)」となり、子音 w が重複する。その結果、重複した音が脱落し、表記も「282(i)+200B(w)+563(限定符)」となる。これが重音脱落表記である。

ところが、このような考え方は、それぞれの文字が持つ音価を横に並べることによって想定されたものである。小辞を構成する「282+200B」の文字列を我々は iw と転写しているが、このことは、この語の実際の発音が

iw(イウ)であったことを保証するものではない。それゆえ、重音脱落表記という用語を設定したものの、重音の脱落が音声言語で本当に生じていたのかということは、別途議論が必要である。むしろ、確実に言えることは、200B という文字が重複して書かれたため、一方が省略されたということであろう。そこで本稿では、文字の重複による省略表記という現象を含め、便宜的に重音脱落表記という名称を用いることとする。

5.4.3 用例の確認

29 例の重音脱落表記の環境をまとめると、表 12 のようになる。用例数が最も多いのは小辞 *iw* に=*w* が接続する場合であり、B1 が 17 例¹⁹、B2 が 1 例²⁰認められた。B1 は 563 のみ、B2 は 562 のみの表記である。5.4.2 で述べたように、この部分が本当に音重複であるのかは別の議論が必要となるが、転写をみる限り、小辞の最後が 200B(*w*) で終わっており、このことから、接尾代名詞の表記に省略が生じていると考えることができる。これは、接続法を作る小辞 *mtw* の場合²¹も同様である。

また、接頭代名詞²²についても同様に扱うことができる。3 人称男女共通複数形の接頭代名詞は *tw=w* で一語となっているが、表記上、*tw* と=*w* に区分することが可能である。

動詞の主語となる場合は、受動接辞.*tw* の後に接尾代名詞=*w* が位置しており、*iw*, *mtw*, *tw=w* と同様に、これも重音脱落だと考えられる²³。

重音脱落表記の中で一見して様相が異なるのが、小辞 *iir*²⁴と小辞 *šʒʹ(n).tʰ*²⁵ の場合である。というのも、これらの例では、転写から重音重複をうかがい知ることができないからである。しかし、両者の小辞の表記は共に 200B の文字で終わっており、それゆえ、文字上の重複を避けて、表記が省略されたものと考えられる。つまり、小辞 *iir* と小辞 *šʒʹ(n).t* の場合は、重音脱

¹⁹ 資料 3, ID. 210-211, 214, 217-218, 220-222, 225, 227-230, 232-235。

²⁰ 資料 3, ID.238。

²¹ 資料 3, ID.216, 223, 226。

²² 資料 3, ID.236。

²³ 資料 3, ID.237。用例は(2)を参照。

²⁴ 資料 3, ID.215, 219, 224, 231。

²⁵ 資料 3, ID.212-213。

落表記というよりも、重ね書き回避による省略と考えた方がよいであろう。

表 12：重音脱落表記の例

環境		重音脱落表記の分類	
		B1	B2
小辞の後 の主語	<i>iw=w</i>	17	1
	<i>mtw=w</i>	3	
	<i>i.ir=w</i>	4	
	<i>ʒʒ^c(n).t=w</i>	2	
接頭代名詞	<i>tw=w</i>	1	
動詞の主語	<i>in.tw=w</i>	1	
合計		28	1

5.5 小結

本稿で述べた=*w*の表記形とその環境をまとめると、表 13 のようになる。この結果から言えることは、接尾代名詞=*w*の表記と使用環境との間に、ある程度の対応関係が見られるということである。

その一つ目は、重音脱落表記における 563 [B1] の使用である。563 は、561 や 562 と比較して、いわば有標な形状を持つ文字である。重音脱落表記では、もともと二文字で書かれる=*w*において省略が行われ、一文字＝一語となる。しかも、その一文字も、三本線というテキストの中で埋没しそうな文字となっている。しかし、そのような表記の省略を代償するように、有標な字形の 563 が採用されている。この点は、563 の使用法として、着目されてよい。

二つ目は、不定詞や前置詞の目的語に A2 が多いという結果である。

三つ目は、561 を使用した A3 の用例がきわめて少なく、特に重音脱落表記においては、561 のみで表記される B3 の表記が見られないという点である。表 5 に示したように、561-563 の中で最も使用頻度が高いものが 561 であるが、接尾代名詞=*w*の表記では、むしろ 561 の使用が極力控えられている。561 の用法で頻度の高いものは、名詞の限定符となるものである

が、名詞等に使用される限定符としての三本線と、接尾代名詞で使用される三本線の混同を回避させるかのように、同じ三本線であっても、接尾代名詞= w の表記では、561の使用が極力控えられていたのであろう。

表 13 : $=w$ の表記形の分類とその環境

環境	$=w$ の表記形の分類					合計
	A1	A2	A3	B1	B2	
不定詞の目的語	3	9	1			13
前置詞の目的語	2	5	4			11
所有冠詞	2	3				5
独立代名詞	1					1
名詞に接続	1					1
動詞の主語	4	1		1		6
小辞の後の主語				26	1	27
接頭代名詞(主語)				1		1
合計	13	18	5	28	1	65

6 おわりに

本稿では、神官文字の 561, 562, 563 の字形と用法を踏まえつつ、3 人称男女共通複数形の接尾代名詞= w の表記とその環境について分析を行った。その結果は特に 5.5 にまとめた通りであるが、今回の分析から得た知見をもとに、古代エジプト語の文法研究のあり方について、提言を述べておきたい。

その一つ目は、文法書の記述においても、語の表記法に関する目配りが重要となるという点である。聖刻文字と神官文字は複雑な表記法を持っており、語の表記法が一定ではない。言い換えれば、聖刻文字と神官文字は正書法を持たないため、同一の語であっても表記に揺れが認められる。そ

のような表記の揺れは、時に書記の自由な判断に委ねられていることもあるが、本稿で確認したように、語の環境に応じて、緩やかではあるが、異表記の使い分けが意図されていたように思われる。言語学の研究において音素のレベルで捉えた異形態については注意が払われているが、文献言語学の研究では、同一形態素の異表記についても注意を払う必要がある。

二つ目は、原資料の字形を確認することが、文法理解にも役に立つという点である。聖刻文字の Z2, Z3a, Z3 の違いは、字素の向きと配列が異なるのみであり、それゆえ研究者の多くがそれら文字の機能差を認識してはいない。実際、聖刻文字の資料を読んでいると、Z2, Z3a, Z3 の違いを意識することは少ない。ところが、神官文字の 561, 562, 563 は、聖刻文字とは異なる視覚的な形状差を持っており、その中で有標な形状を持つ 563 は、接尾代名詞=wの重音脱落表記で多用されるという特異な役割を担っていた。

本稿では、文字の字形に着目しながら表記法の環境について考察し、独自の知見を得た。その際に重要となっていたのは、原資料の文字を読むという行為である。20 世紀の言語学では、文字と切り離されたところにある「言語」が分析の対象となっていた感があるが、古文献を読み、そこから言語を抽出するという文献言語学的な作業は、原資料の文字を読むことを抜きに行うことはできない。

資料 1: 音節補助として使用されている 561-563 の用例

ID	分類	箇所	語	意味	品詞
1	561	1,7	<i>mngbti</i>	メンゲブティ	名詞-固有
2	561	1,54	<i>mn</i>	非存在	小辞
3	561	1,58	<i>mn</i>	非存在	小辞
4	561	2,1	<i>mn</i>	非存在	小辞
5	561	2,23	<i>mn</i>	非存在	小辞
6	561	2,64	<i>r-bnr</i>	外に	副詞
7	561	2,68	<i>r-bnr</i>	外に	副詞
8	561	2,77	<i>mn</i>	非存在	小辞

資料 2 : =w 以外の語の限定符として使用されている 561-563 の用例

ID	分類	箇所	語	意味	品詞
9	561	1,4	<i>whʒh</i>	文書	名詞
10	561	1,6	= <i>n</i>	我々の	代名詞-接尾
11	561	1,10	<i>rmt</i>	人	名詞
12	561	1,10	<i>nb</i>	金	名詞
13	561	1,11	<i>hd</i>	銀	名詞
14	561	1,11	<i>hd</i>	銀	名詞
15	561	1,12	<i>nb</i>	金	名詞
16	561	1,12	<i>hd</i>	銀	名詞
17	561	1,14	<i>hd</i>	銀	名詞
18	561	1,14	<i>hd</i>	銀	名詞
19	561	1,16	<i>ʔy</i>	偉大な	形容詞
20	561	1,16	<i>sw</i>	彼	代名詞-従属
21	561	1,16	<i>sw</i>	彼	代名詞-従属
22	561	1,16	<i>sw</i>	彼	代名詞-従属
23	561	1,17	<i>ptr</i>	見よ	小辞
24	561	1,18	<i>ʔm</i>	寝る	動詞-不定詞
25	561	1,19	<i>hd</i>	銀	名詞
26	561	1,21	<i>nhʒy</i>	-	冠詞-不定
27	561	1,30	<i>hd</i>	銀	名詞
28	561	1,31	= <i>tn</i>	あなたがたの	代名詞-接尾
29	561	1,31	<i>hd</i>	銀	名詞
30	561	1,31	= <i>tn</i>	あなたがたの	代名詞-接尾
31	561	1,34	<i>ʒh(w)t</i>	産物	名詞
32	561	1,39	<i>ʔy</i>	偉大な	形容詞
33	561	1,47	<i>hʔp.w</i>	休んでいる	動詞-状態形
34	561	1,52	<i>whʒ</i>	無知な人	名詞
35	561	1,52	<i>sʔ(t)</i>	証書	名詞
36	561	1,53	<i>st</i>	それら	代名詞-従属

37	561	1,54	$s^r(t)$	証書	名詞
38	561	1,55	$is.t$	船員	名詞
39	561	1,55	$drdr$	異国の人	名詞
40	561	1,57	$is.(y)t$	船員	名詞
41	561	1,58	$is.yt$	船員達	名詞
42	561	2,7	$3h.(w)t$	産物	名詞
43	561	2,8	$r(t)$	巻物	名詞
44	561	2,8	$n3y=f$	彼の	冠詞-所有
45	561	2,8	$it.y$	支配者	名詞
46	561	2,9	hd	銀	名詞
47	561	2,9	nb	あらゆる	形容詞
48	561	2,9	$r(t)$	巻物	名詞
49	561	2,11	hd	銀	名詞
50	561	2,11	nb	金	名詞
51	561	2,12	mrk	メレク	名詞-固有
52	561	2,13	$b3k$	仕事	名詞
53	561	2,15	$n3y=k$	あなたの	冠詞-所有
54	561	2,15	$n3y=k$	あなたの	冠詞-所有
55	561	2,17	$n3y=k$	あなたの	冠詞-所有
56	561	2,18	$tp.y$	長	名詞
57	561	2,20	drw	限り	名詞
58	561	2,24	$st<sw$	彼	代名詞-従属
59	561	2,29	hd	銀	名詞
60	561	2,29	nb	金	名詞
61	561	2,30	$ht.(w)$	木材	名詞
62	561	2,30	$ht.(w)$	木材	名詞
63	561	2,30	$n3y=k$	あなたの	冠詞-所有
64	561	2,30	$it.(y)$	父達	名詞
65	561	2,31	$n3y=k$	あなたの	冠詞-所有
66	561	2,31	$it.y$	支配者	名詞

67	561	2,33	<i>drw</i>	限り	名刺
68	561	2,33	<i>n3y=k</i>	あなたの	冠詞-所有
69	561	2,33	<i>rm̄(w)</i>	人々	名詞
70	561	2,34	<i>nkt</i>	何か	名詞
71	561	2,34	<i>ʒh(w)t</i>	産物	名詞
72	561	2,36	<i>nb</i>	あらゆる	形容詞
73	561	2,38	<i>mdh̄</i>	切られた	動詞-分詞
74	561	2,40	<i>nb</i>	金	名詞
75	561	2,40	<i>hd</i>	銀	名詞
76	561	2,41	<i>ʕrʂn</i>	花	名詞
77	561	2,42	<i>ʕrʂn</i>	花	名詞
78	561	2,42	<i>rrmw</i>	魚	名詞
79	561	2,42	<i>rʂwt</i>	喜び	動詞-不定詞
80	561	2,43	<i>whm</i>	繰り返し	動詞-不定詞
81	561	2,48	<i>n3y=i</i>	私の	冠詞-所有
82	561	2,48	<i>it(y)</i>	父達	名詞
83	561	2,48	<i>n3y=k</i>	あなたの	冠詞-所有
84	561	2,48	<i>it(y)</i>	父達	名詞
85	561	2,52	<i>st</i>	それら	代名詞-接頭
86	561	2,53	<i>rm̄</i>	人	名詞
87	561	2,53	<i>ipwty</i>	使者	名詞
88	561	2,53	<i>rm̄</i>	人	名詞
89	561	2,54	<i>n3y=f</i>	彼の	冠詞-所有
90	561	2,54	<i>ipwty</i>	使者	名詞
91	561	2,54	<i>n3y=k</i>	あなたの	冠詞-所有
92	561	2,54	<i>iry(w)</i>	仲間	名詞
93	561	2,54	<i>rʂi</i>	喜び	動詞-不定詞
94	561	2,56	<i>rm̄</i>	人	名詞
95	561	2,57	<i>n3y=i</i>	私の	冠詞-所有
96	561	2,57	<i>is.yt</i>	船員達	名詞

97	561	2,58	<i>m-h3w</i>	背後に	前置詞
98	561	2,59	<i>sš</i>	書物	名詞
99	561	2,62	<i>nkt</i>	何か	名詞
100	561	2,63	<i>st<sw</i>	彼	代名詞-従属
101	561	2,63	<i>tkr</i>	チェケル	名詞-固有
102	561	2,64	<i>š^c(.t)</i>	証書	名詞
103	561	2,65	<i>gš.w</i>	鳥	名詞
104	561	2,66	<i>st</i>	それら	代名詞-従属
105	561	2,69	<i>šhr</i>	事柄	名詞
106	561	2,70	<i>šhr</i>	事柄	名詞
107	561	2,71	<i>=tn</i>	あなたがたの	代名詞-接尾
108	561	2,72	<i>=n</i>	我々の	代名詞-接尾
109	561	2,72	<i>=n</i>	我々の	代名詞-接尾
110	561	2,72	<i>iry(.w)</i>	仲間	名詞
111	561	2,73	<i>=tn</i>	あなたがたの	代名詞-接尾
112	561	2,77	<i>rml(.w)</i>	人々	名詞
113	561	2,77	<i>=tn</i>	あなたがたの	代名詞-接尾
114	561	2,82	<i>is.t</i>	船員	名詞
115	561	2,82	<i>st</i>	それら	代名詞-接頭
116	561	2,83	<i>is.t</i>	船員	名詞
117	561	2,83	<i>rml(.w)</i>	人々	名詞
118	562	1,2	<i>ntr.w</i>	諸王	名詞
119	562	1,4	<i>ntr.w</i>	諸王	名詞
120	562	1,5	<i>ntr.w</i>	諸王	名詞
121	562	1,15	<i>ntr.w</i>	諸王	名詞
122	562	1,15	<i>β.wy</i>	諸国	名詞
123	562	1,21	<i>hrw.w</i>	日々	名詞
124	562	1,39	<i>šdd.y</i>	少年	名詞
125	562	1,54	<i>š</i>	杉	名詞
126	562	2,1	<i>br</i>	船	名詞

127	562	2,4	<i>ntr.w</i>	諸王	名詞
128	562	2,7	<i>br(y)</i>	船	名詞
129	562	2,14	<i>rbrn</i>	レバノン	名詞-固有
130	562	2,14	<i>ht.w</i>	木材	名詞
131	562	2,15	<i>ht3.w</i>	帆	名詞
132	562	2,15	<i>br(y)</i>	船	名詞
133	562	2,15	<i>ht(w)</i>	木材	名詞
134	562	2,16	<i>ʕs.w</i>	杉	名詞
135	562	2,17	<i>ht3.w</i>	帆	名詞
136	562	2,18	<i>br(y)</i>	船	名詞
137	562	2,20	<i>t3.wy</i>	諸国	名詞
138	562	2,24	<i>rbrn</i>	レバノン	名詞-固有
139	562	2,25	<i>ntr.w</i>	諸王	名詞
140	562	2,28	<i>rbrn</i>	レバノン	名詞-固有
141	562	2,29	<i>nswt.y</i>	諸王	名詞
142	562	2,29	<i>h3ty(w)</i>	先の	形容詞
143	562	2,30	<i>ntr.w</i>	諸王	名詞
144	562	2,34	<i>ntr.w</i>	諸王	名詞
145	562	2,35	<i>n3</i>	-	冠詞-定
146	562	2,37	<i>ʕt</i>	証書	名詞
147	562	2,41	<i>nwh</i>	ロープ	名詞
148	562	2,41	<i>hbs</i>	服	名詞
149	562	2,43	<i>ht(w)</i>	木材	名詞
150	562	2,49	<i>tt</i>	旗竿	名詞
151	562	2,55	<i>ntr.w</i>	諸王	名詞
152	562	2,56	<i>ntr.w</i>	諸王	名詞
153	562	2,57	<i>br(y)</i>	船	名詞
154	562	2,59	<i>ntr.w</i>	諸王	名詞
155	562	2,60	<i>n3</i>	-	冠詞-定
156	562	2,60	<i>knw</i>	多くの物	名詞

157	562	2,62	<i>ht(.w)</i>	木材	名詞
158	562	2,63	<i>br</i>	船	名詞
159	562	2,65	<i>nʒ</i>	-	冠詞-定
160	562	2,66	<i>nʒ</i>	-	冠詞-定
161	562	2,71	<i>ms^c</i>	行進	動詞-不定詞
162	562	2,72	<i>nʒ</i>	-	冠詞-定
163	562	2,72	<i>br(.y)</i>	船	名詞
164	562	2,72	<i>tttt</i>	議論	名詞
165	562	2,74	<i>tʒw</i>	風	名詞
166	562	2,77	<i>md.t</i>	話し	名詞
167	562	2,80	<i>tʒw</i>	風	名詞
168	563	1,23	<i>nʒ</i>	-	冠詞-定
169	563	1,55	<i>hʒr</i>	カル	名詞-固有
170	563	2,6	<i>nʒy=i</i>	私の	冠詞-所有
171	563	2,12	<i>wn.w</i>	-	転換詞
172	563	2,22	<i>nʒ</i>	-	冠詞-定
173	563	2,75	<i>nʒy</i>	それらの者達	代名詞-指示

資料 3 : =w の語の限定符として使用されている 561-563 の用例

ID	分類	箇所	表記法	環境	
174	563	1,26	A1	所有冠詞	<i>pʒy=w</i>
175	563	2,7	A1	所有冠詞	<i>nʒy=w</i>
176	563	2,23	A1	前置詞の目的語	<i>im=w</i>
177	563	2,43	A1	前置詞の目的語	<i>r-hʒt{t}=w</i>
178	563	2,31	A1	動詞の主語	<i>ir.y=w</i>
179	563	2,51	A1	動詞の主語	<i>ir.y=w</i>
180	563	2,51	A1	動詞の主語	<i>ir.y=w</i>
181	563	2,67	A1	動詞の主語	<i>gd=w</i>
182	563	2,5	A1	独立代名詞	<i>ntw</i>
183	563	2,16	A1	不定詞の目的語	<i>ir=w</i>

184	563	2,17	A1	不定詞の目的語	$ir=w$
185	563	2,75	A1	不定詞の目的語	$iwd=w$
186	563	2,52	A1	名詞に接続	$st=w$
187	562	1,25	A2	所有冠詞	$n\acute{y}=w$
188	562	2,31	A2	所有冠詞	$p\acute{y}=w$
189	562	2,52	A2	所有冠詞	$t\acute{y}=w$
190	562	1,5	A2	前置詞の目的語	$m-b\acute{h}=w$
191	562	2,29	A2	前置詞の目的語	$(m)-di=w$
192	562	2,44	A2	前置詞の目的語	$hr.r=w$
193	562	2,71	A2	前置詞の目的語	$m-hnw=w$
194	562	2,78	A2	前置詞の目的語	$im=w$
195	562	2,22	A2	動詞の主語	$di=w$
196	562	2,7	A2	不定詞の目的語	$\$w=w$
197	562	2,16	A2	不定詞の目的語	$\$d=w$
198	562	2,20	A2	不定詞の目的語	$grg=w$
199	562	2,43	A2	不定詞の目的語	$\$d=w$
200	562	2,43	A2	不定詞の目的語	$\$d=w$
201	562	2,44	A2	不定詞の目的語	$ith=w$
202	562	2,81	A2	不定詞の目的語	$\$sp=w$
203	562	2,83	A2	不定詞の目的語	$s^{\epsilon}h^{\epsilon}=w$
204	562	2,83	A2	不定詞の目的語	$hdb=w$
205	561	1,4	A3	前置詞の目的語	$n=w$
206	561	1,33	A3	前置詞の目的語	$n=w$
207	561	2,37	A3	前置詞の目的語	$n=w$
208	561	2,73	A3	前置詞の目的語	$n=w$
209	561	2,72	A3	不定詞の目的語	$w\acute{d}=w$
210	563	1,4	B1	小辞の後の主語	$iw=w$
211	563	1,5	B1	小辞の後の主語	$iw=w$
212	563	1,19	B1	小辞の後の主語	$\$3^{\epsilon}(n).t=w$
213	563	1,26	B1	小辞の後の主語	$\$3^{\epsilon}(n).t=w$

214	563	1,33	B1	小辞の後の主語	<i>iw=w</i>
215	563	1,56	B1	小辞の後の主語	<i>i.ir=w</i>
216	563	1,56	B1	小辞の後の主語	<i>mtw=w</i>
217	563	1,59	B1	小辞の後の主語	<i>iw=w</i>
218	563	2,1	B1	小辞の後の主語	<i>iw=w</i>
219	563	2,2	B1	小辞の後の主語	<i>i.ir=w</i>
220	563	2,7	B1	小辞の後の主語	<i>iw=w</i>
221	563	2,7	B1	小辞の後の主語	<i>iw=w</i>
222	563	2,9	B1	小辞の後の主語	<i>iw=w</i>
223	563	2,18	B1	小辞の後の主語	<i>mtw=w</i>
224	563	2,30	B1	小辞の後の主語	<i>i.ir=w</i>
225	563	2,31	B1	小辞の後の主語	<i>iw=w</i>
226	563	2,36	B1	小辞の後の主語	<i>mtw=w</i>
227	563	2,43	B1	小辞の後の主語	<i>iw=w</i>
228	563	2,43	B1	小辞の後の主語	<i>iw=w</i>
229	563	2,44	B1	小辞の後の主語	<i>iw=w</i>
230	563	2,49	B1	小辞の後の主語	<i>iw=w</i>
231	563	2,52	B1	小辞の後の主語	<i>i.ir=w</i>
232	563	2,63	B1	小辞の後の主語	<i>iw=w</i>
233	563	2,66	B1	小辞の後の主語	<i>iw=w</i>
234	563	2,67	B1	小辞の後の主語	<i>iw=w</i>
235	563	2,72	B1	小辞の後の主語	<i>iw=w</i>
236	563	1,5	B1	接頭代名詞	<i>tw=w</i>
237	563	2,38	B1	動詞の主語	<i>in.tw=w</i>
238	562	2,29	B2	小辞の後の主語	<i>iw=w</i>

【参考文献】

- Černý J. & S. I. Groll (1993) *A Late Egyptian Grammar*. 4th edition. Rome.
- Gardiner, A.H. (1929) The Transcription of New Kingdom Hieratic. *The Journal of Egyptian Archaeology* 15: 48-55.
- Gardiner, A.H. (1957) *Ancient Egyptian Grammar: Being an Introduction to the Study of Hieroglyphs*. 3rd. edition. Oxford.
- Junge, F. (2005) *Late Egyptian Grammar: An Introduction*, 2nd edition. Oxford.
- Коростовцев, М.А. (1960) *Пчтешесые Ун-Амчна в Библ Егиский иератический папирис №120*. Государственного музея изобразительных искусств им. А. С. Пушкина в Москве.
- Möller, G. (1909-1912) *Hieratische Paläographie*. 3 volumes. Leipzig.
- 永井正勝 (2005) 「古代エジプト聖刻文字の書字方向- 一般統字論構築の一助として-」『一般言語学論叢』8: 22-45.

On alloforms and their environments
of the pronominal suffix =w
in the “Moscow Hieratic Papyrus No. 120”

Masakatsu NAGAI

According to the list of “suffix pronouns” shown in *A Late Egyptian Grammar* by J. Černý and S.I. Groll, the third-person plural suffix =w has several alloforms, such as 200B+563, 200B+562, 200B+561, 563, 562, 575+200B+563, and 575+200B+562 in the Hieratic script. In this short article, I investigated all the alloforms of the pronominal suffix =w in the “Moscow Hieratic Papyrus No. 120” and determined that the use of Hieratic sign 563 is not common as a determinative of a noun, but is usual as a determinative of the pronominal suffix =w, especially in writing morphemes that have undergone haplogy.

Faculty of Humanities and Social Sciences

University of Tsukuba

1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-0006, Japan

E-mail: nagai.masakatsu.ft@u.tsukuba.ac.jp